社会事業史学会 ニュースレター

No.36

事 務 局：〒480-1198 愛知県長久手市茨ケ廻間 1522-3　愛知県立大学
宇都宮研究室 ☎ 0561-76-8702 ✉ utu(@)ews.aichi-pu.ac.jp

振込口座：ゆうちょ銀行 01730-8-125532 社会事業史学会

【第 53 回大会開催にあたって】

金子光一会長

社会事業史学会第 53 回大会開催にあたりご挨拶申し上げます。

まずは、第 53 回大会の開催校をお引き受けくださった弘前学院大学・学長の髙松彰先生はじめ諸先生方に心から感謝の意を表したいと思います。ありがとうございました。

また、本大会の実行委員に加わって、大会開催の準備にご尽力頂いた東北地域の先生方にもお礼申し上げます。ありがとうございました。

さらに、本日は中国慈善史学会および韓国社会福祉歴史学会に所属されている多くの会員の方にご参加頂いております。後ほどご挨拶を頂きたいと思います。

本学会の大会を関東圏以外で開催するのは、コロナ禍以降、初めてでございます。北海道の北星学園大学で開催された第 47 回大会が 2019 年 5 月ですので、かれこれ 6 年ぶりの地方での開催となります。

さて、ここ青森県、弘前市は、この時期でも岩木山の方に行けば、桜を楽しむことができ、今の時期は、可愛いりんごの花が咲き始めています。夏はねぷた祭りがあり、秋はりんごの収穫があり、冬は雪がしんしんと降り、一年を通じて四季が楽しめる素晴らしいところです。

昨年 12 月に刊行された本学会の機関誌（『社会事業史研究』64 号）の巻頭言に書かせて頂きましたので、ご覧頂いた方もいらっしゃると思いますが、私事ですが、私の母方のルーツがここ弘前市にあり、スタディツアーで回って頂いた本行寺というお寺に亡くなった母（旧姓・山中）の先祖代々の墓があります。そのようなことから、私にとって弘前はとてもゆかりのあるところで、この地で社会事業史学会の大会を開催できることを心から嬉しく思っております。

さて、ここにきて大きな話題になっているのが、日本学術会議の新法制定の件です。現行法を廃止して新たに制定する日本学術会議法案は、2025 年 3 月上旬に内閣府より国会に提出されましたが、学問の自由を担保する日本学術会議の存在意義そのものを危うくする内容が含まれています。とりわけ、これまでの日本学術会議法の前文で「わが国の平和的復興、人類社会の福祉に貢献する」とうたい、政府から独立して職務を行うことが明記された前文が、新法では前文ごとなくなり、「平和」も「独立」も記載されません。

そこで、日本学術会議の協力学術研究団体の一つである本学会も、法案に対して修正を含めた慎重な議論を求めるという会長声明を先月23日に発出しました。

さらに、社会学、社会福祉学、社会政策学の研究者の署名活動においては、「呼びかけ人」となりました。お蔭様で、現在、2,000名近い署名を集めました。

しかしながら、昨日（5月9日）の衆議院・内閣委員会で新しい法案は賛成多数で可決されたという連絡がありました。誠に残念なことです。ただ、同時に可決された付帯決議の内容は私たちが求めていたものですし、5月下旬には参議院で審議されますので、新たな付帯決議あるいは修正をする余地はまだ残っています。これからも引き続き、日本学術会議の協力学術研究団体としての責務を果たしていきたいと思います。

もう一つ、このことと関連して憂慮しているのが、「世界平和」です。今年はちょうど終戦から80年の節目の年ですが、ご承知の通り、世界では戦争や紛争が続いている国・地域があります。また、多元的な価値を認めず、独裁的に自国優先の政策を展開し、世界にさまざまな影響を与える一国の大統領がおり、その大統領が仲裁を買って出ていますが、どうなることでしょうか。わかりません。

これからの社会では、一元的に拡大・成長を目指すことよりも、私たちの暮らしを豊かで幸せにするためのイノベーションが求められます。またそのベクトルは、明らかに多元的な価値軸（環境やウェルビーイングなど）に基づいたすべての「いのち」を大切にする社会、さらに言えば、「すべての生命（いのち）を尊重し、その価値を認め合う社会」に向いています。

社会福祉の歴史を研究する者として、今一度、この節目の年に全世界の恒久的平和を訴えたいと思います。

さて、本大会のテーマは、「東北と福祉実践――地域から研究方法論の具体的展開を考える」です。

近現代の東北において、日常の生活問題に慈善事業や社会事業がどのように対応してきたのか、あるいは対応できなかったのか、その限界を含めて、戦後に至るまでの史実を検証すると伺っています。

近年、社会全体としてさまざまな課題への対応にスピード感とわかりやすさが求められる時代になっているように思います。しかしながら、多様な要素が複合的に関連している事柄については、一定の時間をかけて解明する必要があり、そのためには、堅実な熟考の積み重ねが求められると思います。

「利用者本位」「エンパワーメント」などを、いわば「水戸黄門の印籠」のごとく、いきなりもちだして、処方箋を書く方向に走ろうとすることは避けるべきだと思います。どこまでできて、何ができなかったのか、それが何故できなかったのか、そこにはどのような歴史的な背景があったのか、丹念に検証しなければならないと思います。

そのような意味で、第53回大会が、ご参加頂いた皆さま方にとって実り多い大会となりますことを祈念して、私からの開会の挨拶に代えさせて頂きます。

（金子光一）

【大会事務局報告】第 53 回大会の報告

社会事業史学会第 53 回大会は、「東北と福祉実践――地域から研究方法論の具体的展開を考える――」をテーマに、2025 年 5 月 10 日(土)から 11 日（日）にかけて弘前学院大学にて開催されました。

事前申込状況としては、大会参加には 60 人、スタディ・ガイドには 22 人、情報交換会には 43 人でした。また、中国からは 10 人、韓国からは 21 人もの方々が参加してくださいました。

大会 1 日目午前にスタディ・ガイドを行いました。スタディ・ガイドには 53 人もの人が参加してくださり、バス 2 台を手配しました。約 3 時間かけて、弘前公園～弘前教会～五重塔～本行寺～長勝寺～弘前愛成園（児童養護施設）をご案内いたしました。1 日目午後の自由論題報告は、発表時間 40 分（報告 30 分、質疑応答 10 分）で、5 つの分科会に分かれ、19 題目が報告されました。「日本・韓国・中国における学術交流の推進に関する覚書」に基づく国際学術交流として、中国から、周東華氏（杭州師範大学）、曾桂林氏 （湖南師範大学歴史文化学院）、葉宗宝氏（中国・信陽師範大学）、韓国から、金珉澈氏（瑞永大学校）、張英美氏（三育大学大学院社会福祉学科博士課程）、鄭鍾和氏（三育大学）に研究報告をしていただき、討論がなされました。

自由論題報告後は、弘前パークホテルに会場を移し、情報交換会を開催しました。情報交換会では名誉会員称号授与式や韓国および中国からの参加者との交流もありました。情報交換会には、80 人もの多くの方が参加してくださいました。

大会 2 日目の共通論題報告は、「東北と福祉実践――地域から研究方法論の具体的展開を考える」をテーマとしました。コーディネーターに開催校から松本郁代会員（弘前学院大学）が趣旨説明を行い、シンポジストに井川裕覚会員（淑徳大学）、岡本周佳会員（静岡福祉大学）、高梨友也会員（東北文教大学）平将志会員（九州産業大学）から報告がなされました。各報告に対するコメンテーターは菊池義昭名誉会員（淑徳大学長谷川仏教文化研究所）が担いました。近現代の東北において日常の生活問題に慈善事業や社会事業がどのように対応してきたのか、あるいは対応できなかったのか、史実を把握する試みと同時に、福祉実践史研究の方法論に関しても議論が展開されました。大変贅沢な時間であったと思います。

大会終了後に実施した Web アンケートの結果、大会内容が充実していた、研究交流によって新たな知見を獲得できた、地域に即したスタディ・ガイドがよかった、参加者間で国際交流ができた等の感想がありました。また共通論題報告にて社会福祉の歴史研究の方法の根幹を学ぶことができたとの感想もありました。大会運営に関しては、会員・非会員の分け隔てない対応に好感がもてたとの感想も寄せられました。

ありがとうございました。

（大会実行委員長 松本郁代）

参加してくださった会員・非会員の皆様、シンポジスト、コーディネーター、コメンテーターの皆様、ご協力いただいた開催校、弘前学院大学の先生方や大学院生・学部生の皆様に心から感謝いたします。ありがとうございました。

（事務局長　宇都宮みのり）

◆◆名誉会員からの挨拶◆◆

2025 年度総会において、菊池義昭会員と永岡正己会員が名誉会員に推挙され、承認されました。

社会事業史学会・名誉会員
　菊池　義昭　殿

　貴殿は、本学会の理事・監事として、2000 年より通算 17 年間の長きにわたり、本学会の発展に貢献してくださいました。よって社会事業史学会規約第９条および社会事業史学会名誉会員選出規則第２条第２項により、名誉会員の称号を授与します。

2025 年５月 10 日

社会事業史学会会長　金子 光一

【菊池義昭名誉会員挨拶】

　この度は名誉会員の称号を授与くださいまして、本当にありがとうございます。

　私は、永岡正己先生のように社会事業史研究の本流を歩んできたわけではなく、むしろ私は郡山市にある日本大学工学部建築学科出身ということで、社会福祉学のプロパーでもありません。そのような私が、社会福祉の歴史研究に携わるようになった原点には、学生時代に日大・東大闘争というものがあり、それに遭遇したからでした。

　当時の日本大学では、大学側が不祥事を起こし学園紛争になっておりました。私はその最中に入学し、全学部が学生によって封鎖され、私の入学した郡山市の工学部も学期の途中で封鎖され、授業ができなくなりました。私はノンポリの学生でしたが、先輩からは、「お前らは将来中間管理職になっていくが、それでいいのか。何のために大学に入って来たのか」と質問されました。

　そんな出来事があり、広い視野から自分を見つめ直し、社会を見つめていくことが必要で、かつ重要であることに気付きました。そこで、卒業研究では知的障がい児者施設の建築の歴史を研究することにし、幸運にも、埼玉大学の清水寛先生に出会うことができました。また、歴史研究のことはほとんど知らなかったのですが、一番ケ瀬康子先生、津曲裕次先生、松矢勝宏先生などの有名な先生方のご指導をいただく機会を得ました。

　このため、建築学科を卒業しましたが、建築は自然環境破壊の学問に近いと考え、地元福島県の知的障がい児施設で働くことにし、その後知的障がい者施設でも働き、通算 18 年間勤めました。また、幸運にも、私が勤めた施設の園長が永井健二先生で、その永井先生を中心に福島県内の社会福祉の現場で働く関係者の自主的研究会（福島社会福祉研究会）がありました。その研究会では毎月１回研究会を開催しましたが、その研究会で私は社会福祉を本格的に学びました。

　さらに、このような自主的研究会（東北ソーシャルワーカー協会）が宮城県にもあり、仙台キリスト教育児院の大坂譲治先生、田代国次郎先生、筑前甚七先生などがおられました。そこで、大坂先生や筑前先生と協議し、社会福祉の現場実践だけではなく、東北の社会福祉の歴史を研究してまとめようということになり、東北社会福祉史研究連絡会を設立し研究に着手しました。

　このため、私は、社会福祉の歴史研究を学問として学んだ研究者ではなく、学問的基礎を持たない在野の研究者なのです。在野の研究者のいいところは、いろいろな発想から自分流のやり方で、自分流の研究方法を使って研究ができるというところで、かなり自由に研究的なことを実施してき

ました。
　それでも、幸運にも、このような私を拾ってくださり、社会事業史研究会に入会させて頂き、吉田久一先生や一番ケ瀬康子先生からご助言を仰ぎ、長谷川匡俊先生、宇都榮子先生、大友昌子先生とも出会うことができました。
　話が長くなるので結論を申し上げますと、私の研究スタイルは、「社会福祉の実践現場が前衛で、研究は後衛である。研究者が前衛に出て社会福祉を取り仕切るのでなく、常に社会福祉の現場の歴史に学びつつ、社会福祉の現場で働く実践者に役立つ歴史研究を目指したい」という研究スタイルで、今後ももう少し研究を続けていきたいと考えております。
　このような名誉ある称号を受けるとは思っていませんでした。本当にありがとうございます。
（菊池義昭）

（菊池義昭名誉会員：左）

社会事業史学会・名誉会員
　永岡　正己　殿

　貴殿は、本学会の前身の社会事業史研究会の頃より、拡大世話人会のメンバーであり、1992 年より通算 27 年間にわたり理事を歴任され、2007 年から 2015 年には会長として、本学会の発展に貢献してくださいました。よって、 社会事業史学会規約第 9 条および社会事業史学会名誉会員選出規則第 2 条第 1 項により、名誉会員の称号を授与します。

2025 年 5 月 10 日
社会事業史学会会長　金子 光一

【永岡正己名誉会員挨拶】

　このたびは名誉会員の称号を授与していただきましてありがとうございます。私は名誉会員にふさわしいとは思えないですが、もう少し頑張れという意味でいただいたものと思っております。
　振り返りますと、私は、学部は同志社大学で小倉襄二先生のもとで学びました。ベトナム反戦運動、社会の変革を求める大学闘争の頃でしたが、人権と社会問題と福祉を底辺からの視座と歴史認識を基礎として教えていただきました。いつも温かい励ましがあり、その後も長く支えていただき、今も自らの土台になっております。
　それから大阪市立大学大学院で、小倉先生と同様に社会事業史研究会の関西の中心のお一人だった柴田善守先生の指導を受け、理論史や大阪の運動史について学びましたが、その頃、柴田先生から社会事業史研究会第 3 回例会で発表するように言われました。それがきっかけで、当時の学会の先生方とお会いすることになり、吉田久一先生からもご指導いただくようになりました。そのことはすごく恵まれていたと思っております。吉田先生や奥様の教えや願いをあとに伝え、受け継いでいかないといけないと思いますし、また課題とし

て残されていることを整理し、後の人が解決できるようにつなぎたいと思ってきました。

また、大阪では研究会の関西の世話人だった右田紀久恵先生にもお世話になり、同じく実践史・女性史に取り組んで亡くなった姉・井上和子ともども、地域福祉のことをはじめ親しくご指導いただいてきました。また京都の真田是先生の研究会に参加した時には宮田和明先生や井岡勉先生など本学会のメンバーがおられました。

その後、日本福祉大学に1978年に赴任しました。カリキュラム改革で社会福祉発達史が外国と日本それぞれ4単位必修になる時で、高島進先生と一緒に担当することになりました。先生は、人権を守るために社会福祉を発展させねばならないという熱い思いをもち、社会福祉とは何か、その本質と役割、現状と展望を追求する未来への視座をもっておられました。新しい理論的課題や一次史料の問題については、次の時代、次の世代に任せるよとおっしゃって、何よりも今を変えようとされていました。高島先生は研究会創設から学会設立まで、一番ヶ瀬先生と一緒に吉田先生を支えてこられましたが、一番ヶ瀬先生が世話人代表になり、高島先生が事務局長をされた時、私はその下で事務局をさせていただき、大変ありがたい、かけがえのない時間を過ごすことができました。

日本福祉大学には、児島美都子先生、窪田暁子先生、秦安雄先生はじめ、何人もお顔とお名前が浮かびますが、各分野で現実の問題に立ち向かって当事者、専門の視点、運動の組織化も開拓しながら、歴史研究を大事にしている方が多くおられ、本学会とのつながりもありました。隣接の学問領域の方たちの福祉への関心からも、歴史的視座の大切さがよく伝わってきました。また、私は日本キリスト教社会福祉学会にも所属していましたが、本学会に関わる方たちが多くおられましたし、また東京の社会福祉実践史研究会では、その後親しくさせていただく方たちとお会いしました。

そういう多くの人たちの思いがつながって学会が発展してきたように思います。社会事業史学会では誰もが相互に主体的で創造的に研究を推進していく、そのために発表の時間はしっかり取って議論を深める、そして発表した報告は責任をもって論文にして発表するということが言われました。厳しさというか、社会福祉の歴史を会員の主体的な力によって開拓する、そのような学会であることを改めて感じています。会長在任中には長谷川匡俊先生に教えていただき、宇都先生に支えていただき、二期目は、西崎先生に支えていただき、他にもお名前を挙げねばなりませんが、感謝するばかりです。

私は、社会福祉理論・思想史のほか、大阪を中心とした地域福祉の歴史を課題としてきました。また移民社会と植民地の問題が社会福祉の歴史にとって円環のような構造にあることを感じ、ワシントン大学の研究員の時から一次史料に取り組みましたが、関心と研究範囲が広くなり、あっというまに時間が過ぎてしまいました。

歴史の細部にこだわる研究をしてきましたが、社会福祉を発展させたい、いのちを守る、人権を守る、生活を守りたい、との思いがいつもあります。被爆した詩人の峠三吉が「にんげんをかえせ」「くずれぬへいわをかえせ」と書いているとおりです。また宮沢賢治が死ぬ前の最後の手紙で、「本気に観察した世界の実際」を語り、「どうか今のご生活を大切にお護り下さい」と書いた、そのような人間の自由、権利、生きる意味を問い続けたいと思います。

東北の地で、明日のシンポジウムにもありますけど、現実を見据えて、賢治が目指したように、ほんとうの幸いを考えて、社会福祉をしっかり深く実現してゆくことが、社会福祉の歴史研究の役割だと思います。それは実践と結びついて総体として明らかにするものでもあります。みんなでそれぞれの研究分野を分担しながら、全体としてはこういう役割を持っているんだということを意識して、研究を発展させていってほしいと思ってお

ります。社会事業史学会は、そういう主体性、共同性を持った集まりですので、そのことを大事にして、金子会長を中心に、これからのさらなる発展を心から願っております。

　最後に、自らの歩みを顧みて悔いばかり残っておりますが、残された時間で役割を果たし、研究も少しでも進めたいと思っております。また数年前から少し体調が整わない状態が続き、思いようにできないこともあり、ご迷惑をおかけして申し訳なく思っております。皆様から教えていただいて、交流もしながら、研究と実践を通して社会福祉の未来を考えていきたいと思います。これからもどうぞよろしくお願いします。この度は名誉会員の称号をいただき、心より感謝申し上げます。

(永岡正己名誉会員：左)

(名誉会員称号授与式が行われた情報交換会の様子、2025/5/10、弘前パークホテルにて)

会員動向

(1)　動向

【2021年4月19日現在】　会員総数319名
【2022年5月14日現在】　会員総数316名
【2023年5月 9日現在】　会員総数315名
【2024年4月24日現在】　会員総数308名
【2025年4月11日現在】　会員総数309名

(2)　入会承認者10名(承認日)（敬称略）

【2024年 5月 1日付】高木美桜・北村典幸・竹鼻始
【2024年 5月12日付】索宏
【2024年 9月26日付】増木風佳・塩田芙美・髙市勢津子・畠山望
【2024年12月 6日付】兎澤聖・山田宗寛

(3)　退会者9名（退会日）（敬称略）

【2024年 9月26日付】小島和貴・田中利宗・伏見裕子・望月ミチ
【2025年 3月31日付】田中貴美子・田中耕一郎・月田みづえ・田中武士
【2024年12月11日付】岡本民夫名誉会員（ご逝去にともなう退会）

2024年度事業報告

1　機関誌『社会事業史研究』(第64号)発行（2024年12月）
2　学会ニュースレター（No.35）の発行（2024年9月）
3　第52回大会開催（(2024年5月11日～12日、東洋大学：対面）
4　学会第14回若手研究者研究交流会（2024年5月11日、東洋大学：対面）
5　第4回中国社会史学会慈善史専門委員会年次大会（河南大学）への参加・研究発表（2024年10月26～27日、2名）
6　韓国社会福祉歴史学会秋期大会（ソウル）への参加（2024年12月6日、2名）

2024 年度会計報告

（1）　一般会計資金収支決算書

勘定科目			2024 年度 予算額（A）	2024 年度 決算額（B）	備考
収入	1.繰入金収入		963,604	963,604	
	2.会費収入		2,376,000	2,320,120	名誉会員 11 名を除いた会員数 298 名の年会費
	3.寄付金収入		10,000	0	
		1.一般寄付金	10,000	0	
		2.その他の寄付金	0	0	
	4.売上収入		401,000	211,820	
		1.機関誌売上	400,000	202,125	社会事業史研究売上（Vol.64）として
		2.史資料ガイドブック	1,000	0	
		3.その他	0	9,695	授業目的公衆送信補償金（学術著作権協会）として
	5.事業収入		0	591,570	
		1.大会（52 回）開催補助金戻入	0	591,570	第 52 回大会（東洋大学）からの戻入金として
	6.受取利息配当金収入		100	6,309	
経常収入計			3,750,704	4,093,423	
支出	1.事務費支出		820,000	765,820	
		1.事務費	120, 000	70,140	振込手数料・名誉会員記念品・国際交流費(調印ファイル)・会計事務アルバイト代（24H）として
		2.事務委託料	700,000	695,680	会員管理(個人情報保護含む)、HP 管理として 国際交流委員会費通訳代(99,983 円)を含む
	2.事業費支出		1,995,000	1,805,730	
		1.大会開催補助費(53 回)	600,000	600,000	第 53 回大会（弘前学院大学）への支払い
		2.機関誌印刷代	900,000	1,063,090	機関誌(第 64 号)
		3.編集委員会経費	200,000	63,350	Slack 使用料、書籍発送料等
		4.歴史教育委員会経費	0	0	
		5.国際交流委員会経費	120,000	79,290	通訳代・来賓贈答品、VISA 取得費等
		6.史資料問題委員会経費	0	0	
		7.文献賞経費・吉田久一研究奨励賞	100,000	0	
		8.右田研究奨励基金審査委員会	30,000	0	
		9.50 周年事業委員会経費	45,000	0	
		10.社会福祉史辞典編集委員会経費	0	0	
	3.学会連合等会費		50,000	50,000	社会学系コンソーシアム、日本社会福祉系学会連合、社会政策関連学会協議会会費として
	4.繰入金支出		885,704	1,471,873	
経常支出計			3,750,704	4,093,423	

（2）2024 年度　特別会計資金収支決算書

勘定科目		2023 年度 繰越金(a)	2024 年度 入金(b)	2024 年度 出金(c)	残高 (a)＋(b)-(c)
入金・出金	1.社会事業史学会文献賞副賞*1	5,830,799	0	401,760	5,429,039
	2.吉田久一研究奨励賞副賞*2	25,210,366	11,335	1,000,440	24,221,261
	3.右田基金副賞	10,000,266	5,124	0	10,005,390
	4.すみ基金*3	7,707,802	0	0	7,707,802
	5.指定寄付金	2,001,130	1,347	0	2,002,477
	6.50 周年記念 *4	2,334,753	0	0	2,334,753
	7.40 周年記念事業指定寄付金*5	690,000	0	0	690,000
	合計	53,085,116	17,806	1,402,200	51,700,722

*1 文献賞 2 件
*2 刊行費助成 1 件
*3 学会 50 年史
*4 学会 50 年史、社会福祉史辞典
*5 学会 50 年史

2025 年度事業計画

1　機関誌『社会事業史研究』発行（第 65 号）
2　学会ニュースレター発行（No.36）
3　第 53 回大会（2025 年 5 月 10 日～11 日、弘前学院：対面）
4　若手研究者研究交流会（2025 年 5 月 10 日、弘前学院大学：対面）
5　『学会創立 50 年史』刊行
6　『社会福祉辞典』刊行
7　中国社会史学会慈善史専門委員会との学術交流
8　韓国社会福祉歴史学会との学術交流

◆◆2025 年度予算◆◆

（1）　一般会計資金収支予算書

勘定科目			2024 年度決算額（A）	2025 年度予算額（B）	備考
	1.繰入金収入		963,604	1,471,873	
収入	2.会費収入		2,320,120	2,384,000	名誉会員 11 名を除いた会員数 298 名の年会費
	3.寄付金収入		0	10,000	
		1.一般寄付金	0	10,000	
		2.その他の寄付金	0	0	
	4.売上収入		211,820	406,000	
		1.機関紙売上	202,125	400,000	機関誌（第 64 号）として
		2.史資料ガイドブック	0	1,000	
		3.その他	9,695	5,000	授業目的公衆送信補償金（学術著作権協会）として
	5.事業収入		591,570	0	
		1.大会開催補助金戻入	591,570	0	
		2.　その他	0	0	
	6.受取利息配当金収入		6,309	5,000	
経常収入計			4,093,423	4,276,873	
支出	1.事務費支出		765,820	820,000	
		1.事務費	70,140	120,000	
		2.事務委託料	695,680	700,000	会員管理（個人情報保護）、HP 管理
	2.事業費支出		1,805,730	2,085,000	
		1.大会開催補助費(54 回)	600,000	600,000	2025 年度予算第 54 回分として
		2.機関誌印刷代	1,063,090	900,000	機関誌（第 65 号）印刷費等
		3.編集委員会経費	63,350	200,000	機関誌（第 65 号）編集費等
		4.歴史教育委員会経費	0	100,000	
		5.国際交流委員会経費	79,290	90,000	3 か国協定に基づく交流費、通訳・翻訳費等
		6.史資料問題委員会経費	0	0	
		7.文献賞経費・吉田久一研究奨励賞	0	100,000	文献購入・発送費等
		8.右田研究奨励基金審査委員会	0	30,000	文献購入・発送費等
		9.50 周年事業委員会経費	0	45,000	編集に伴う費用として
		10.社会福祉史辞典編集委員会経費	0	20,000	編集に伴う費用として
	3.学会連合等会費		50,000	50,000	社会学系コンソーシアム、日本社会福祉系学会連合、社会政策関連学会協議会会費として
	5.繰入金支出		1,471,873	1,321,873	
経常支出計			4,093,423	4,276,873	

（2）2025 年度　特別会計資金収支予算書

勘定科目		2024 年度 繰越金(a)	2025 年度 入金予定(b)	2025 年度 出金予定(c)	残高 (a)＋(b)-(c)
入金	1.社会事業史学会文献賞副賞	5,429,039	0	0	5,429,039
	2.吉田久一研究奨励賞副賞	24,221,261	10,000	0	24,231,261
	3.右田基金副賞	10,005,390	5,000	0	10,010,390
	4.すみ基金	7,707,802	0	0	7,707,802
	5.指定寄付金	2,002,477	1,300	0	2,003,777
出金	6.50 周年記念事業　*1	2,334,753	0	2,334,753	0
	7.40 周年記念事業指定寄付	690,000	0	690,000	0
	合計　*2	52,390,722	16,300	3,024,753	49,382,269

*1「50 周年記念事業」は、2022 年度通常総会において新設された特別会計の科目。（2021 年度にすみ基金から 50 周年事業（学会 50 年史：180 万円、50 周年記念論文集：350 万円、社会福祉史辞典：100 万円）に振り替えた（「2022 年度通常総会資料」より）630 万円の中から、2022 年度に 50 周年記念論文集 3,965,247 円が執行された。残額は学会 50 年史、社会福祉史辞典のために出金予定。ただし、50 周年記念論文集の支出が予算超過したため、不足分は「すみ基金」から支出される。

*2 総会資料の（「2024 年度繰越金(a)」の「合計」において、「４０周年記念事業指定寄付金」が加算されていなかったため、本報告にて訂正する。

【正誤表】

（正）	合計	52,390,722	16,300	3,024,753	49,382,269

（誤）	合計	51,700,722	16,300	3,024,753	48,692,269

◆◆その他総会での報告事項◆◆

（1）第 43 回社会事業史文献賞・第 15 回吉田久一研究奨励賞について

◆社会事業史学会文献賞への推薦：なし

◆吉田久一研究奨励基金

・吉田久一研究奨励賞（研究助成）への応募：なし

・吉田久一研究奨励賞（刊行費助成）への応募：なし

（2）委員長の交替について

◆機関誌編集委員長　　今井小の実会員⇒野口友紀子会員

◆社会福祉歴史教育委員長　野口友紀子会員⇒今井小の実会員

（3）他組織・団体との連携・協働について

◆社会政策関連学会協議会

・2025/3/15 社会政策関連学会協議会公開シンポジウム「学会の将来を考える」をハイブリッド（対面・オンライン）にて開催

◆社会学系コンソーシアム

・2025/1/26　第 17 回評議員会オンラインにて開催(能田・宇都宮出席)

・2025/3/8　社会学系コンソーシアム 2024 年度（第 17 回）シンポジウム「＜原爆＞をめぐる記憶と継承」を日本学術会議との共催でオンラインにて開催

◆日本社会福祉系学会連合

・2024/11/30　日本社会福祉系学会連合主催「With コロナ時代における研究に関する状況とニーズと学会活動のあり方についてのワークショップ」

・日本社会福祉系学会連合ニュースの発行
http://jaswas.wdc-jp.com/news/index.html

・2025/3/18　災害福祉アーカイブ
http://jaswas.wdc-jp.com/archives/index.html

・震災と社会福祉論文

・コロナと社会福祉論文

（4）第 54 回社会事業史学会全国大会・若手研究者研究交流会・通常総会の開催について

◆開催日程

若手研究者研究交流会　　2026 年 5 月 9 日（土）

第 54 回社会事業史学会全国大会　　2026 年 5 月 9 日（土）～10 日（日）

2026 年度社会事業史学会通常総会　2026 年 5 月 10 日（日）

◆開催場所

熊本学園大学　〒862-0971 熊本県熊本市中央区大江 2 丁目 5-1

https://www.kumagaku.ac.jp/

◆◆事務局からの連絡とお願い◆◆

(1) 『社会事業史研究』への投稿について

HP に掲載されている投稿規程及び執筆要項に従って、必要書類を作成の上、編集委員会まで送付してください。会員の皆様奮ってご応募ください。投稿先は以下の通りです。

社会事業史学会編集委員会
E-mail: journal.jshssw[at]gmail.com（[at]を@にして送信してください）

※電子投稿になりました。

(2) 社会事業史文献賞の推薦のお願い

- 社会事業史学会では、研究の奨励と質の向上を図ることを目的として、1982 年に「社会事業史文献賞」を創設して以来、優れた社会事業史研究成果を表彰しています。この度、下記の要領にて第 44 回社会事業史文献賞の候補を募集しますので、推薦をお願いいたします。
- 本学会会員による、原則として、2024 年 4 月より 2025 年 3 月に至る 1 か年に発行（公表）された社会事業史関係著書・論文・翻訳及び編纂文献を審査対象とします。但し、原則として過去において本賞を受賞した会員による文献についてはこれを除きます。
- 本学会会員からの推薦（自薦を含む）とします。
- 本学会に設置する「社会事業史学会文献賞審査委員会」において審査の上、1 名を選考します。受賞者の発表は総会において行います。総会において会長より賞状と副賞（20 万円）が贈呈されます。
- 「社会事業史文献賞推薦用紙」は、同封の用紙もしくは社会事業史学会ホームページからダウンロードした所定の用紙を使用し、必要事項をご記入のうえ、2025 年 10 月末日（必着）までに、事務局まで郵送もしくはメールにより提出してください。自薦の場合、可能であれば自著 5 冊を事務局までお送りください。
- 文献賞にふさわしい研究書をぜひご推薦ください。

(3) 吉田久一研究奨励基金の募集について

- 社会事業史学会では、社会福祉史研究の質の向上、進展をはかることを目的として、2010 年より吉田久一研究奨励基金（2022 年 5 月に改称）の授与を開始し、優れた若手研究者の研究を奨励しています。この度、下記の要領にて第 16 回吉田久一研究奨励基金の募集をしますので、積極的な応募をお願いいたします。
- 「研究費助成」に該当するテーマを有する個人、もしくは「刊行費助成」に該当するテーマを有する個人又はグループ代表者が応募資格を有します。
- 本学会に設置する「吉田久一研究奨励基金審査委員会」において審査の上、「研究費助成」は 3 名以内、「刊行費助成」は 1 件を採択します。採択者の発表は総会において行います。　総会において会長より助成金（研究費助成 1 件当たり 30 万円、刊行費助成 1 件当たり 100 万円）が授与されます。

- 社会事業史学会ホームページより、所定の申請書一式をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ、2025 年 12 月 1 日（必着）までに、事務局まで郵送してください。
- 会員の皆様、奮ってご応募ください。

(4) 右田紀久恵女性史研究基金の募集について

- 社会事業史学会では、社会事業／社会福祉分野において開拓的な役割を果たした女性についての研究を奨励し、その研究成果を「出版」することを目的として、学会創設 50 周年を機に、右田紀久恵女性史研究基金（出版助成）の授与を開始し、優れた研究を表彰しています。この度、下記の要領にて右田紀久恵女性史研究基金（出版助成）を募集しますので、積極的な応募をお願いいたします。
- 個人研究の場合は、原則として、応募締切日において 2 年以上の会員歴を有すること。グループ研究の場合は、原則として、社会事業史研究を行う 2 名以上のグループを対象とし、メンバー代表者が応募締切日において 2 年以上の会員歴を有すること。
- 本学会に設置する「右田紀久恵女性史研究基金審査委員会」において審査します。採択者の発表は総会において行います。総会において会長より助成金（100 万円を上限とする）が授与されます。
- 社会事業史学会ホームページより、所定の申請書一式をダウンロードし、必要事項をご記入のうえ、2025 年 12 月 1 日（必着）までに、事務局まで郵送してください。
- 会員の皆様、奮ってご応募ください。

(5) 2025 年度会費納付のお願い

- 株式会社ガリレオより会員の皆様に会費納付のお願い通知が届いていると思います。まだお振込みいただいていない会員の皆様は、早めに今年度会費（8,000 円）をお振込みください。

よろしくお願いします

年会費（8,000 円）の
振込先口座番号
ゆうちょ銀行
01730-8-125532
社会事業史学会

◆◆問合せ先◆◆

◎会費や入退会についての問合せ
◎住所変更・メールアドレスの登録
〒170-0013
東京都豊島区東池袋 2-39-2-401
(株)ガリレオ内
問合せフォーム：http://shakaijigyoushi-gakkai.com/n4P1n0
FAX 03-5981-9852
◎学会運営に関する問合せ
〒480-1198
愛知県長久手市茨ケ廻間 1522-3　愛知県立大学教育福祉学部社会福祉学科
社会事業史学会事務局　宇都宮みのり
問合せフォーム：http://shakaijigyoushi-gakkai.com/n4P1n0
utu(@)ews.aichi-pu.ac.jp